

# 詩人 新川和江 その足跡をたどる

結城が生んだ詩人・新川和江さん。現在は、東京都内に住まいながら、結城に思いを馳せられています。

毎年2月に行われる、子どもたちの詩のコンクール「新川和江賞」。名誉市民であり、そしてゆうき図書館名誉館長でもある新川さんが「生まれ故郷の結城でなら」と、自身の名を冠した唯一のコンクールです。

今回は、新川さんの足跡をたどりながら、第14回新川和江賞の様子をお伝えします。

\* この写真は2009年(平成21年)に撮影したものです。



億年啼きつづけて鳥  
その歌も完成しない  
新川和江

## 略歴

- 1929年(昭和4年) 結城郡絹川村小森に生まれる  
県立結城高等女学校(現結城第二高等学校)時代、下館町に疎開してきた詩人・西條八十から詩の手ほどきを受ける  
戦後上京し、少女雑誌や学習雑誌に詩や小説を執筆する
- 1953年(昭和28年) 第一詩集「<sup>ねむ</sup>睡り椅子」を刊行
- 1960年(昭和35年) 「季節の花詩集」で小学館文学賞受賞 ほか受賞作多数
- 1981年(昭和56年) 日本現代詩人会理事長に就任
- 1982年(昭和57年) 産経新聞一面に連日掲載の「朝の詩」が始まり 2018年(平成30年)まで36年間にわたり選者をつとめる
- 1983年(昭和58年) 吉原幸子とともに女性詩人を中心とする季刊詩誌「現代詩ラ・メール」を創刊。1993年(平成5年)の終刊まで編集に携わり、女性詩人の活動を支援する
- 1984年(昭和59年) 結城市民栄誉賞を受賞
- 2000年(平成12年) 勲四等瑞宝章を受章
- 2001年(平成13年) 結城市名誉市民の称号が贈られる
- 2004年(平成16年) ゆうき図書館名誉館長に就任。同年11月、詩をとおして人生などさまざまなことを語り合える場「センダンの木の集い」を創設し、母校絹川小学校で開始する
- 2008年(平成20年) 「新川和江賞～未来をひらく詩のコンクール～」を創設



幼少期の姿



15歳のとき、西條八十の書齋へはじめて抱えて行った自作ノート。表紙は同氏の詩集をまねて、自身で装訂している。



「現代詩ラ・メール」創刊記念パーティー  
(左から) 小海智子さん、津島祐子さん、新川さん、吉原幸子さん、李礼仙さん



新川和江賞は「詩を書く喜びを見出してほしい」という子どもたちへの想いが込められている。

## 新川和江さん 特別寄稿

### 「ふるさとの山はありがたきかな」

たくぼく  
(と啄木もうたっていますので)

東京に住むようになって間もなくの頃、こんな詩を書いたことがあります。

私のふるさとは  
東北本線を小山で降りて  
エンピツ書きのような支線に乗りかえ  
筑波のむらさきが少しづつ濃くなるほうへ  
ことごと揺られて行ったところ

あれから数十年、車椅子暮らしの老人になった今でも、思い出すのは、田んぼの上を吹き渡ってくる風に、セーラー服の胸のリボンをこころよく揺すられながら、東の空に見上げた、あの二つの峯のことなのです。

戦時下の結城高女については、長くなりますので次の機会にゆずらせて頂きますが、平和の時代が到来し、結婚をして上京した私は、学習雑誌や少女雑誌に詩や物語をせっせと書くようになりました。「小学館文学賞」という賞を頂いてからは、主としてNHKの音楽番組「あなたのメロディー」などいくつかの番組に、呼び出されるようになりました。

ある年の正月のこと、「ふるさと対談」という番組が企画され、名を挙げれば皆さんご存じの映画スターや女優さん、スポーツマン、小説家、映画監督、財界人と、肩の凝らないお喋りをするよう命じられました。その中のお一人である三井不動産の江戸英雄氏のご生家が、<筑波学園都市>とあって、結城よりもっと間近でなつかしの山が見られそうだと、わくわくしました。

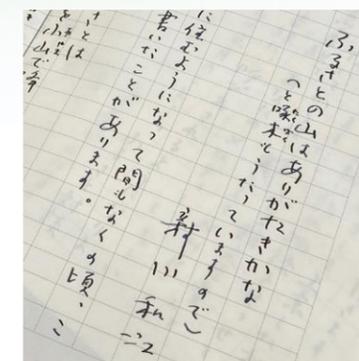
お約束の当日、NHKの車に便乗して江戸氏のご生家に運ばれ、広い庭先におろされました。私服にくつろいだ江戸氏が待っていてくださいましたが、初対面のご挨拶もそこそこに、私はお

庭を西側に回り、筑波山の容姿を求めました。

ところが、ところが、ところがです！男峰のあのすくとした立ち姿が見えないのです。見えないどころか、だらしなく寝そべっているではありませんか！「私の郷里の結城から見る筑波山が、一番美しいのです」と私は口走り、「いや、ここで見る筑波が一番！」と江戸氏も譲りません。しばらく問答が続いたあとで、双方その談義の幼さに気付く。日当たりのいい縁側に腰かけて、お茶を頂いたのです。

しかし四十年余り経った今でも、思い出すと走って行って、寝そべっている山の肩のあたりを叩き、「どうしたの、起きなさい。立って奥さんの峯と、仲よく並んであげなさい！」と言ってやりたくなるのです。

私のふるさと自慢は、第一に結城紬、城下町の名残りのT字路の構造、節分に大釜やへっついを庭に持ち出して炊くすみつかれ、ほかにもいろいろあるのですけれど、万葉の時代からうたわれ続けて来た筑波山の、わけても結城から眺めた山容の美しさに、ふれさせて頂きました。(原文ママ掲載)



寄稿いただいた原稿  
(令和4年1月)